

## 新 おおさか KEYワード【第31回】

# 浄瑠璃から歌舞伎、落語へ 忠臣蔵も大阪人の手で面白い話に

12月になると思い出すのが「忠臣蔵」である。時は元禄15(1703)年12月14日、江戸城中、松之廊下での刃傷で切腹した浅野内匠頭たくみのかみの敵討ちに、播州赤穂藩の浪士四十七人が本所松坂町(東京都墨田区)の吉良邸に討ち入った。

世間を騒がせたこの事件は、翌年、江戸山村座の芝居にとりいれられ、宝永3(1706)年には、「太平記」の時代に置き換えた近松門左衛門の人形浄瑠璃「碁盤太平記」が上演されている。

そして寛延元(1748)年、二代目竹田出雲・三好松洛しょうらく・並木千柳せんりゅう合作の「仮名手本忠臣蔵」が道頓堀で上演され、大ヒットした。これも時代は室町時代で、登場人物も大石内蔵助おおし いらのすけは大星由良助おほし りょうすけ、浅野内匠頭えんやは塩冶判官しよじのりかみ、吉良上野介こうずけのすけは高武蔵守師直たかむらさき の もろなおに変えている。この浄瑠璃は歌舞伎となり、時代劇の定番として映画やテレビドラマ化されていく。

文楽の「仮名手本忠臣蔵」を最初に舞台で見たのは、私が大学に入学した昭和53(1978)年の文楽協会創立十五周年記念公演だった。落語に凝っていた私は、落語がネタとした芝居の原点を知りたいと考え、当時文楽が本拠地ほんこにしていた道頓堀の朝日座での通し狂言を見に行った。長丁場であり、幕間に客席で食べるため、母が持たせてくれたお弁当の卵焼きを今も覚えている。

落語の「質屋芝居」には、「忠臣蔵」三段目「裏門の段」のセリフが出てくるし、「蔵丁稚」は四段目「判官切腹の段」を踏まえている。

忠臣蔵四段目の筋は以下の通り。切腹の前に無念を伝えたい、内匠頭がモデルの判官が「由良助は」と尋ねるが、由良助の息子・力弥さしやうつかまつが「いまだ参上仕りませぬ」と答える。これがくりかえされ、覚悟を決めた判官がついに腹に刃を突き立てたところ、息を切らせて大星が到着し「御前」と呼びかける。「由良助でかア」「ハハア〜!」「待ち兼ねたわやい」となる名場面である。

厳粛な空気を壊さぬよう観客の出入りも規制され、「通さん場とさんば」とも呼ばれる一幕だが、落語の「蔵丁稚」では、滑稽なストーリーが展開する。芝居好きで仕事をサボって小屋に入り浸っていたお仕置きに、蔵に閉じ込められたのが、丁稚の定吉だ。

暗い蔵のなかで定吉は、袴や竹光をひっぱり出し、四段目の一人芝居で気を紛らわせていたが、空腹で泣き言をいいた。その声に旦那だんなさんも少しは反省したかと様子を見に行くと、定吉の手に竹光が真剣のように光ってい

る。腹がすきすぎて乱心したかと、慌てて「御膳〜」のかけ声で食事を定吉の前に突き出すと、「蔵の内をかア」「ハハア〜!」「待ちかねたア」とサゲになる。

この神聖な「通さん場」を戯画にしたのが、今回の表紙にした洋画家小出楯重(1887~1931)の挿絵である。随筆「観劇漫談」の最後の一節には、「挿入の絵は公設市場に蟹が並べてあるのではない。忠臣蔵四段目、福助(注、四代目中村福助)の判官が切腹を終ったすぐあとの、静寂なる場面の印象を描いたものである」とある。

この言い草がなんともおもしろい。「公設市場」は、大正7(1918)年、米騒動の経験から物価安定のために大阪市が日本で最初に設立した公営の小売市場で、最新施設を小出は早速、随筆のくすぐりに取り入れたわけですね。

七段目「祇園一カ茶屋の段」を題材とした落語「七段目」にも、家業そっちのけで芝居小屋に出入りし、日常会話にちじょうかいわが歌舞伎調になってしまう熱狂的な若旦那と、芝居好きな丁稚が登場する。昔の大阪には、こんな好き者、いや、困り者がたくさんいたのだろう。

ところで「忠臣蔵」と言えば、大阪市には、ゆかりの寺院が谷町筋にある。寛永7(1630)年創建の曹洞宗万松山吉祥寺(天王寺区六万休町)である。元文4(1739)年に江戸の泉岳寺にさがかけて赤穂義士の墓が建立され、いまも例年12月に「大阪義士祭」が開催され、子ども時代行列や奉納武道ほか催しが開かれている(今年は開催中止)。平成14(2002)年には、討ち入り三百年記念に四十七士の群像が建立された。

来る令和5年は、コロナ禍もウクライナの戦火もおさまり、「待ちかねたあ〜」と呼べる年にしたいものである。



義士の寺 万松山吉祥寺



吉祥寺の四十七義士の石像

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館教授(前館長)、大阪大学人文学研究科(兼任)。1958年、大阪生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂一なにわ 知の巨人」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメーजी増殖するマンモス/モダン都市の現像』(創元社)など。